



医療の現場から

from the medical front

TEAMS



現在7名在籍する各医師が
専門性を持って診療を進めている。

研究内容

- 緒方氏** パーキンソン病・パーキンソン病関連疾患の
早期診断方法
- 新保氏** レビー小体型認知症などの画像診断
- 輿水氏** 炎症性疾患の画像診断
- 相馬氏** 脊髄小脳変性症や遺伝性神経疾患
- 中村氏** 多発性硬化症をはじめとする免疫性神経疾患
- 西村氏** 認知症の画像診断や筋疾患
- 大槻氏** 失語症や高次脳機能障害について



北海道脳神経外科記念病院

札幌市西区八軒9条東5丁目1-20

<https://www.hnsmhp.or.jp/>



医療の現場から

from the medical front

Interview with
Akihiko
Ogata

地域医療の 一翼を担う病院をめざして

〔後編〕

北海道大学、脳神経外科教室の初代教授である都留氏を記念して1983年に設立された北海道脳神経外科記念病院。人口約200万人の札幌市で、北海道大学に次ぐ規模の病院として地域医療を支え続けている。認知症やパーキンソン病患者が約50%を占める同院では、早期診断・早期治療を目指し、地域の病院や診療所と連携した取り組みを続けている。前半では同院の特徴である神経外科と神経内科を併設することの利点について、また地域連携を推進する取り組みについて伺った。後編では、神経学の専門医だから診断できる早期診断のありかたについて話を訊く。

緒方 昭彦氏

PROFILE

北海道脳神経外科記念病院脳神経内科 副院長/パーキンソン病研究センター長併任
北海道大学神経内科非常勤講師/北海道医療大学薬学部特別講師

学歴	1981年3月	北海道大学医学部卒業 北海道大学医学部脳神経外科・神経内科診療班にて研修
	1985年7月	神経内科専門医取得
	1986年4月	北海道大学大学院医学研究科病理系入学
	1990年3月	北海道大学大学院医学研究科修了
学位	1990年3月	日本脳炎ウイルスの研究にて医学博士(北海道大学)
職歴	1990年4月	釧路労災病院神経内科科長
	1993年7月	北海道大学医学部助手(医学部生化学第一講座)
	2002年11月	北海道大学大学院医学研究科助手(神経内科学)
	2003年10月	北海道大学大学院医学研究科神経内科講師
	2005年10月	北海道脳神経外科記念病院神経内科部長 北海道大学神経内科非常勤講師
	2012年10月	北海道脳神経外科記念病院 神経内科 副院長
	2015年4月	パーキンソン病研究センター長併任

在外研究	1994年6月から1997年3月 Alexander von Humboldt 財団奨学生として ドイツ・Wuerzburg(ヴュルツブルク)大学 ウイルス免疫研究所に留学
所属学会等	日本神経学会専門医・指導医、 日本神経病理学会(代議員)、病理解剖資格認定医 日本神経病理学会北海道地方会(評議員) 日本内科学会 認定内科医・指導医 日本認知症学会 専門医・指導医 MDS-J会員 アメリカ神経学アカデミー正会員 北海道日独協会 副会長・理事 ドイツ フンボルト協会会員 札幌市医師会学術・生涯教育委員

認知症に次いで多い パーキンソン病疾患の研究

脳神経内科疾患は加齢に関係する場合が多い。北海道脳神経外科記念病院の神経内科ではアルツハイマーを中心とした認知症に次いで多いのがパーキンソン病患者だ。日本国内においては患者数が年間15〜20万人とされ(65歳以上の100人に1人)、高齢化による増加が今後も予測されるなか、医療・介護負担を招くことが問題視される神経変性疾患だ。同院では、北海道医療大学との共同開発により、血液診断でパーキンソン病とパーキンソン症候群とを鑑別する方法などで特許を取ったことを契機とし、早期診断と的確な治療を行うために、2011年に研究センターを立ち上げた。現在、センター長である緒方氏をはじめとし、7名の医師が専門分野に研鑽を積んでいる。

「研究所を設立して11年目を迎えました。パーキンソン病の治療方法は薬剤が最も重要ですが、薬の種類が多く、投与量が個人によつて異なります。わたしたちの施設では早期診断のための画像診断や生化学検査を進めており、適切な薬剤治療に効果をあげてきました。特許を取った血液検査による診断や、研究段階ではありますが腸内細菌との関連性など、少しずつ研究の成果がみえはじめています。今後さらに正確なデータを集めて、病気の啓蒙のために成果を広めていくことが必要だと思っています」

神経学的な診療で 早期診断・早期治療につなげる

緒方氏の元を訪れる患者の半数以上が、他院からの紹介による受診だという。その背景には、病院が培ってきた信頼はもちろんだが、神経内科としての専門性の高さや、最新設備による精度の高い診断が可能であることが大きいようだ。

「症状が進行していれば診断はつきやすいと思いますが、進行期になる前に脳神経内科を訪れてもらいたいというのが私の願いです。パーキンソン病にしても認知症にしても、早くに診断をつけてあげて、そこから投薬やリハビリを進めることが非常に大事です」。緒方氏は「早期診断・早期治療」の重要性をたびたび口にする。いかに早い段階で診断ができるかが、予後に大きな差を生むという。

「認知症でもパーキンソン病の患者さんでも、早期に診断が受けられれば、10年20年は十分日頃のADL(日常生活動作)を維持することができます。不安症状が減ってくるんですね。ただし、足の痛みとか軽い物忘れといった早期の症状からだけでは、やはり専門の医師でないと診断がつきにくいことが多いのは確かです」。加齢による病状を診察してもらう際に、神経内科を選択することで、誤った診断を防げる可能性があると緒方氏は話す。

「例えば、パーキンソン病の早期症状で、気分的な落ち込みや声が小さくなるなどの鬱症状がでる場合があります。そうした症状が

でると、まず精神科にかかる方がいらしゃいます。そこで抗うつ剤を処方される。パーキンソン病は抗うつ剤を打つと症状が悪化してしまう病気なので、逆効果です。悪化したために紹介状が出る場合や、本人やご家族がおかしいと感じて来院されることが多々あります。神経内科で診察すると、鬱症状がパーキンソン病によるものと診断が付きまします。細かい神経学的な診察を行うことでしか診断できないケースがあることを、広く知ってもらいたいと思います」

不安を取り除き 地域全体で支える

加齢にともないさまざまな症状が出てくる複合病理の状態です。受診する患者も多い。同院のような大規模の医療機関と地域のかかりつけ医が手を取り合つて患者を支えることが、いかに地域医療を豊かにすることか。緒方氏は、脳神経内科だからできる診断がある一方で、診断がついて病状が安定した後は、かかりつけ医と連携しながら患者の支えになりたいと話す。「当院には診察のための設備が整っています。この環境を有効に使う必要があると思っています。患者さんを見て、いと、

難病だから治らない、助からないという極端な不安症状を抱える方が多いようです。しかし、早期に治療を開始できれば短期間で病状がよくなることもあります。研究は進んでいますし、優秀な治療薬も増えてきています。早期診断で気持ちの上でも安心感をもつていただき、不安を取り除いてあげることが大事だと考えています」

札幌市に根をおろして39年。北海道の地域医療に貢献するためにとの思いで設立された北海道脳神経外科記念病院は、脳神経外科の草分けである都留氏の教えを受け継ぎながら、これからも先端の医療を携えて地域医療を支える存在であり続けるだろう。